

図書館の窓

VOL. 30 NO. 11/12 THE UNIVERSITY OF TOKYO LIBRARY BULLETIN 1991. 12

目 次

- | | |
|--------------------------------|----------------------|
| ○UTnet と図書館情報……………81 | ○写真の保存を考える(2)……………84 |
| ○病いと闘って逝った針貝信子さんを悼む
……………83 | |

UTnet と図書館情報

工学部助教授 武市 正人

東京大学では平成2年度より3箇年計画で情報ネットワークシステムUTnet (University of Tokyo Network System)を建設しています。UTnetは本学における学術研究・教育およびそれらに関連する学術情報処理・事務処理などのあらゆる活動を支える基盤を整備することを目標に、全学の部局を結ぶネットワークを構築するものです。平成2年度には本郷地区のほぼ全域にネットワーク設備が導入され、10数キロメートルに及ぶ基幹ケーブルおよび建物内の支線ケーブル(一部)の敷設が行われて平成3年度より運用に供されています。また、平成3年度には駒場第一地区(教養学部等)・駒場第二地区(先端研等)・六本木地区(生産研・物性研)および本郷地区の一部の整備を進め、本郷地区と結合します。また、平成4年度には田無・中野・白金の各地区のほか、三鷹地区を含む遠隔施設等のネットワーク接続を行う計画です。

平成3年度より「情報ネットワークシステム運用センターNOC (Network Operation Center)」を設置し、UTnetの運用・管理を

始めています。UTnetの一般的な事項についてはNOCで発行している「UTnet広報」に譲り、本稿ではUTnetによる図書館情報の利用法について述べることにします。

情報ネットワークシステムの建設計画にあたって、平成2年3月に高速計算機委員会の学内ネットワーク小委員会では「UTnet計画説明書」を作成し、学内外に広く情報ネットワークシステムの必要性を説き、実現に向けて関係方面の理解を求めました。現在は計画説明書にある基本理念・設計方針に基づいて建設を推進しています。当初より「図書館文献情報の利用」を始めとする学内の共同利用の施設の有効利用を目標の一つに置き、附属図書館に蓄積される文献情報を研究・教育に活用する重要性を謳っています。UTnetの設計にあたってはこうした有用な情報を広く利用できるように最大限の努力をしてきましたが、種々の制約によって後述のように一部利用者の負担による部分もありますので御理解をいただきたいと思います。

学内の教職員・学生が図書館情報を利用す

際には、まず、昭和61年度より運用が始まっているOPACシステムが考えられるでしょう。従来、図書館・図書室に設置されている端末装置、利用者所有の端末装置は専用、あるいは交換による電話回線を経由して情報を伝送するもので、同時に接続できる回線数や回線速度に制約がありました。また、利用者側で電話回線を確保することが困難なことも多かったと思われます。教職員・学生が、学内の各種の学術情報サービスー共同利用の計算機の利用や図書館情報の利用などーを受ける際に、従来はこのように電話回線を使うことが一般的ではありましたが、学内でも昭和61年に設置された工学部データ通信設備(工学部LAN)によって大型計算機センター・教育用計算機センターの計算機は(工学部内からは)電話線を通じることなく利用できるようになりました。ネットワーク設備が電話回線の確保の問題という物理的な制約を解消する面で大きな役割を果たしたことも事実ですが、それ以上に通信の質的向上は利用者に大きな影響を与えました。具体的には、従来のデータ伝送速度が1200ビット/秒～9600ビット/秒であったものが実質的に100万ビット/秒程度に飛躍的に速くなり、文字情報のほか図形情報を端末装置に表示することも可能になりました。さらに、離れたところに置かれた計算機どうしてデータベースなどの資源を共有することも一般的になり、ネットワークの利用により研究・教育は高度化したといえます。

UTnetの設備により図書館情報の利用についてもこのような革新が起こることは容易に予想できることです。利用者の端末装置は「UTnetに接続する」のであって、特定の計算機やサービスに向けて用意するものでなくともよいわけです。いわば相手を自由に選択して(装置によっては同時に複数の相手と)通信ができますので、すでに800台以上の利用者端末のある工学部、約300台の理学部、300台の教育用計算機センター端末などから図書

館情報を利用することができるようになります。

もちろん、こうした情報の提供者は利用者の需要に応えるだけの能力を有する機器を用意する必要があります。現在のところ、平成3年度末に、UTnetの設備として同時に20余りの利用者端末からOPACのサービスを受けられるような装置を導入し、合わせて総合図書館でも機器を用意することになっています。これらの設備は決して十分なものではなく、通信速度の面でも、先ほど述べたように飛躍的な向上というわけにはいきませんが、今後の大学図書館における文献情報の利用の面では大きな礎石となるものと思われます。

数年前から教育用計算機センターの計算機を経由してOPACを利用することが可能になっていますが、平成4年度からはUTnetの利用者はどこからでも利用できることとなります。あらたにUTnetを利用するためにはUTnet広報No.2(平成3年7月)に説明されているように、利用者の用意する機器のほか、一部のケーブル敷設を行う必要のあることもありますが、研究教育にUTnetを活用することをあわせて検討されることを願っております。なお、不明な点については情報ネットワークシステム運用センター(内2750)にお問い合わせください。

数年前より運用されている工学部LANの場合と同様に、ネットワーク設備はたんに利用者の端末装置の接続形態を旧来のものから変えるだけでなく、学内の共有資源の有効利用の面でも今後発展させるべきものであると考えられます。図書館に蓄積された情報を取り出すといったことを手始めとして今後、学内における情報の高度利用に向けて利用者各位の積極的な参画を期待したいと思います。

(たけいち まさと)

(東京大学情報ネットワークシステム
建設推進委員会委員)